

《2013年9月例会報告》

【日 時】2013年9月24日（火）19：00～21：10（その後「ルン」～24：00ごろ）

【会 場】筑波大学附属高校3F会議室（東京都文京区大塚1-9-1）

【テーマ】オリンピック教育の行方

—第9回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムで感じたこと

【演 者】中塚義実（筑波大学附属高校）

【参加者（会員）11名】安藤裕一（筑波大ハンドボール部OB）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、落合博（毎日新聞社）、小池靖（浦和文蔵サッカースポーツ少年団）、嶋崎雅規（帝京中学・高等学校）、白髭隆幸（国際オリンピックアカデミー参加者）、竹内傑（早稲田中等学校）、名方幸彦（文京教育トラスト）、中塚義実（筑波大学附属高校）、中村敬（みどりサッカークラブ）、森政憲（筑波大学大学院コーチング学専攻博士課程）、

【参加者（未会員）4名】大林太朗（筑波大学大学院／CORE スタッフ）、★志村鉄平（早稲田中等学校）、田原淳子（国士舘大学）、★妻木貴雄（筑波大学附属高校副校長）

注1）★は初参加のため参加費無料

注2）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

【報告書作成者】中塚義実

オリンピック教育の行方

第9回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムで感じたこと

中塚義実（筑波大学附属高校／サロン2002 理事長）

<目 次>

自己紹介

はじめに—スポーツ文化研究会「サロン2002」の2011以降のあゆみ

- I. 第9回大会へ向けての準備過程
- II. 第9回大会の概要
- III. 第9回大会の実際
- IV. 生徒の感想
- V. 参加して感じたこと、考えたこと
- VI. ディスカッション

自己紹介—オリンピックとのからみを交えながら

中塚義実（筑波大学附属高校）

この学校で保健体育の教員をやっています。いろんな形でオリンピックにはからんでいきたいと思っています。2020年の東京オリンピックへ向けて思うところはいろいろありますが、その前に、我々は2002年にFIFAワールドカップを経験しているのだということ、そして2019年にラグビーのワールドカップがあるのだということもあわせてクローズアップしていきたいと思います。

落合博（毎日新聞社）

久しぶりの参加です。オリンピックに出たことはありません（笑）。

2020年までの7年間で、どれだけオリンピック教育を日本の中に浸透させることができるかどうか、オリンピックを成功に導くことに関わるのではないかと個人的には考えています。

牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）

読売新聞に長く務め、新聞社に入ったときはメルボルンオリンピック、間もなく1964年の東京オリンピックがあり、オリンピックはほとんど毎回なんらかの形で取材しています。例えば日本が参加しなかったモスクワ大会は、一番いい大会でした。日本がいないから気が楽でした。オリンピックやワールドカップを取材して、オリンピックとは非常によくはない大会だという批判的な意見を持っています。今回東京に決まったのが非常に残念。このため日本のスポーツは10年遅れるんじゃないかと思っています。

竹内傑（早稲田中高等学校）

オリンピックは見に行ったこともありませんけど、保健体育の授業や生徒に質問されたときなどに、オリンピックについて答えられるようになりたいと思っています。

志村鉄平（早稲田中高等学校）

授業などでオリンピック教育をすることもあるので勉強しに来ました。

森政憲（筑波大学大学院コーチング学専攻博士課程）

早稲田高校の講師として体育を教えています。

嶋崎雅規（帝京中学・高等学校）

学校がナショナルトレセンのそばにあり、ナショナルトレセンで生活しているレスリング、フェンシング、卓球、体操の4種目のエリートアカデミーの生徒を学校で預かっています。卓球の谷岡は、卒業しましたがユース五輪に参加し、いま笹田なつみという体操の選手が世界選手権に行っています。そういうこともあり、スポーツクラスでは、総合的な学習の時間でオリンピック教育を1年次に1時間はやっています。

白髭隆幸（国際オリンピックアカデミー参加者）

フリーランスのライター。講談社で出している高校サッカー年鑑の仕事で中塚氏と一緒にになり、2年前から会員。1988年のカルガリー・オリンピックに行き、その年の6月に西ドイツで開かれたヨーロッパ選手権を観戦、そのとき、ミュンヘンで開かれた国際オリンピック・アカデミーのセミナーに参加しました。今後7年間でどういふことをしなくてはならないか。日本人のほとんどは、オリンピックというとオリンピック・ゲームズだと思っています。それをどうやってオリンピック・ムーブメントにつなげていくかが、日本にとっての課題だと思います。

名方幸彦（文京教育トラスト）

NPO 法人で最初は少年サッカーをやっていましたが、この4月から文京ラグビースクールを立ち上げ、活動しています。先週の日曜日もこのグラウンドを使わせてもらって、小学生30名ほどでラグビーを楽しみました。私の中1のとき1964年でした。当時はすべて全員、学校は動員されました。ほとんど誰も行かないようなところにも動員され、私は後樂園でボクシングをみました。白人の人が（血に染まって）真っ赤になる。ボクシングってすごいスポーツだなというのを覚えています。それから日本がぶわ〜と高度成長したので、オリンピックという燃え上がっちゃう。中高年にとってはそういう印象です。

中村敬（みどりサッカークラブ）

先週の火曜日、日程を間違えてお邪魔しました。何年かぶりの参加です。墨田区でサッカークラブに関わっています。以前は知的障害者、スペシャルオリンピックのサッカー指導にも関わっていました。オリンピックの精神的なものをもう一度勉強しに来ました。

大林太朗（筑波大学大学院／CORE スタッフ）

専門はスポーツの歴史。特に関東大震災後の東京市におけるスポーツの役割について研究しています。またCOREの事務局スタッフとしてお手伝いし、昨年はIOAのセミナーにも参加しました。今後も携わっていきたい

田原淳子（国士舘大学）

クーベルタンユースフォーラムに同行しました。今回4回目の参加ですが、毎回思うのは、1週間で生徒がものすごく成長すること、そして高校生ってこんなにすごんだ、能力があるんだということを実感しています。海外のこのような活動のよいところを、少しでも日本に取り入れていきたいと思います。

妻木貴雄（筑波大学附属高校副校長）

本校の副校長です。2年前、北京で行われたユースフォーラムのときは、中高合同研究会や校内研究会で内容をお聞きしたけど、今回はまだ中塚さんからの正式な報告を聞いていないので、臨時参加だがお邪魔させていただきました。

私の専門は化学。サイエンス系のオリンピックで、日本は数学以外、長らく参加しなかった一番の問題は、行ったら日本でも開催しないといけないということです。サイエンス系のオリンピックのお金は膨大。一学会では賄いきれない。化学会のように工業団体とつるんでいるところは多少工業界からお金が出るが。生物学会や物理学会はそうもいかない。化学会は割と早くからオブザーバー参加していたが、正式参加に踏み切らなかったのは、お金の目処が立たないということ。最近やっと参加に踏み切ったのは、文科省の法人でJST（独立行政法人科学技術振興機構）という団体が援助する形で日本大会ができそうだからということ。クーベルタンユースフォーラムも、ずっと行っているだけでいいのかというのもあるだろうが…。そうは言ってもやるとなったらえらいことなので…。そういうあたりもいずれは議論になるのかなあという気がします。

中塚 そのあたりは後半戦の議論の中で触れましょう。

はじめに—スポーツ文化研究会「サロン2002」の2011以降のあゆみ

2年に一度開かれるユースフォーラム。第8回の北京大会については、2011年9月の月例会（第180回）で取り上げた。今回もちょうど9月の月例会ということで、丸2年が経過している。

この間の月例会では、あるときはラグビーを取り上げ、またあるときは北朝鮮やタイやブラジルなどのツアーものと、例によって多彩なテーマを取り上げている。2012年度は「U-18 フットサル」メインテーマとし、月例会だけでなく公開シンポジウムでも取り上げた。つい先日、日本サッカー協会の理事会で、U-18の全国大会がJFA主催事業として始まるという告知があったが、この動きにサロンも大きく関わってきたということになる。

今年度のメインテーマは「サロン2002の法人化」である。これまでずっと任意団体として、ゆるやかなネットワークの良さを生かしながら活動していたのだが、そろそろ次の段階に進もう、事業主体になっていこうということで、法人化プロジェクトを立ち上げ検討している。8月の月例会で一度取り上げ、10月27日も第2弾として月例会で取り上げる。

今日の話の後半戦とも多少関わることもかもしれないので、サロン2002が法人化へ向けて動き出しているということをも最初に報告し、中身に入っていきたい。

I. 第9回大会へ向けての準備過程

1. 参加者の募集と選考

本校が第9回大会に招待されることが正式にわかったのは、2012年の春～夏前のことであった。

生徒への告知は10月4日（木）、前期末の全校集会の場で行った。前回参加した生徒が3年生に在籍していたので、生徒目線での補足もしてもらった。ホームルームで配布したプリントは次ページの通り。

興味ある者は10月22日（月）までに申し出るよう伝え、5名の生徒から申し出があった。第1次エントリーシート、第2次エントリーシート、面談を実施し、国際交流委員会と保健体育科で2名を選考した。

11月14日（水）付で選考結果を通知、派遣生徒は以下のとおり。

皆川宥子（3年2組・剣道部）、加納時定（2年5組・剣道）

引率は、CORE運営委員の中塚義実（保健体育科・蹴球部顧問・3年6組担任）

注）渡航費は筑波大学が、滞在費は国際ピエール・ド・クーベルタン委員会が負担

2. 事前学習

募集と選考が終わったところで、当事者としての2名の生徒だけでなく、学校内でのオリンピック教育を、細々であるが進めていった。

◆12月1日（土）～2日（日）の「オリンピック教育国際セミナー」（於茗溪会館&筑波大学東京キャンパス）…JOAとCOREの共催事業。ギリシャから女性の先生が来日し、グループ討議の形式でのオリンピック教育の授業を実施し、4名の生徒が本校から参加した。

◆12月末～3月 …放課後に、希望する生徒対象の勉強会（2～4名）

スポーツの歴史などの勉強会

◆4月～7月 …毎週木曜日の放課後に勉強会。年度が変わり、ユースフォーラム参加の2名のみの勉強会となった。

◆5月3日（金）午後 …秩父宮記念スポーツ資料館（国立競技場内）&聖徳記念絵画館（明治神宮外苑）見学。フォーラム参加の2名を連れて行った。

◆6月21日（金）放課後：オリンピック教育講演会① 真田久先生（筑波大学体育専門学群長／CORE事務局長）「オリンピックと日本のスポーツ—東京高等師範学校（含附属学校）と嘉納治五郎を中心に」

- ◆7月5日（金）放課後：オリンピック教育講演会② 田原淳子先生（国士舘大学体育学部教授／国際ピエール・ド・クーベルタン委員会理事）

「近代オリンピックの誕生とオリンピック教育の動向ーピエール・ド・クーベルタンの思想と功績を中心に」

- ◆7月13日（土）13：30～16：30 於国連大学 ウ・タント国際会議場

国際シンポジウム「オリンピズムの進化と深化」

2名の生徒を連れて行った。

3. 移動と宿泊の手配

近畿日本ツーリストに、往復の飛行機と、オスロでの宿泊の手配をお願いした。

1) 往復の飛行機と到着日の動き方

スカンジナビア航空便で移動。

- ・往路（※8月9日）成田11:40発⇒コペンハーゲン16:05着/

同日（※8月9日）17:45発⇒オスロ18:55着【14時間15分】

- ・復路（8月18日）オスロ13:45発⇒コペンハーゲン14:55着/

同日（8月18日）15:45発⇒成田 翌日（8月19日）9:35着【12時間50分】

2) オスロでの宿泊（8月9日） BEST WESTERN BONDEHEIMEN

市の中心、カール・ヨハンス通りから150mほどに位置する。観光にも移動にも便利なロケーション。内装は北歐らしい温かみのある印象のファーストカテゴリー3★ホテル。http://www.bondeheimen.no

1シングル 15,500円グロス (SVC, TAX, アメリカンタイプの朝食を含む)

3) オスロ → リレハンメル（8月10日）

8月10日は朝からオスロ観光を楽しんでから、鉄道でリレハンメルへ移動する。

ここから田原淳子先生（国士舘大学／国際ピエール・ド・クーベルタン委員会理事）と合流予定。

Oslo14:59 →16:46 Lillehammer.

注) 上記鉄道を近ツリから紹介されていたが、実際にはこの時刻の列車はなく、

Oslo15：34 →17：48 Lillehammer. で行くことになった

私は8月4日（日）～9日（金）まで、茨城県神栖市波崎で蹴球部3部門（サッカー部、フットサル部、女子蹴球部）の合宿だった。8日午後の練習試合の途中で合宿地を離れ、都内の自宅に戻り、9日の朝に出発するというスケジュール。サッカー部の高校選手権予選が、合宿から戻って14日、16日、18日、20日と予定されており、ユースフォーラムと日程が丸かぶりであった。2年前は顧問不在ののびのびできたからか、22年ぶりの都大会出場を決めてくれたが、今回も「20日の決勝戦には俺も戻ってくるからな。がんばれよ」と言っていたが…。生徒たちは18日の試合で負けてしまい、20日の試合はなくなってしまった。

帰りのオスロからの飛行機が遅れ、コペンハーゲンから成田へ乗り継ぐことができなかった。コペンハーゲン空港では、ミュンヘン、パリ、フランクフルト、アムステルダムと、その日のうちに飛べる飛行機に空きがないかいろいろ探してもらったが、8月下旬の日曜日ということもあってか全便満席で、翌日の同時刻の便で帰るしかない。スカンジナビア航空がホテル代と往復の交通費を負担してくれて、もう1泊、北歐の旅を楽しむことになった。

私は「ラッキー」ととっさに思ったが、生徒たちははじめ戸惑い、あとで喜びに浸っていました。

リレハンメルで、世界の高校生と、オリンピックについて語りませんか？

－第9回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへのオブザーバー参加者（2名）募集について－

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）

筑波大学附属高校 国際交流委員会／保健体育科

今年はオリンピックイヤーでした。メディアからは連日、日本人のメダル争いを中心に、競技会の様子や開催都市の姿が伝えられました。大会後はメダリストが大勢テレビに出演していましたね。

オリンピックが「4年に一度開かれる、スポーツの国際的競技会」ということは誰もが知っていることでしょう。しかし残念ながら、オリンピックの本当のねらいである「オリンピズム」について、あまり語られることはありません。それは、体と心と知性の調和的発達を目指した人間の育成と、国際理解・国際平和の推進が核となる人生哲学であり、近年は「卓越（Excellence）」「友情（Friendship）」「尊重（Respect）」という言葉でその価値が表現されています。4年に一度の競技会は、これらの理念を広め、実現させていくための一つの方法なのです。

こうした理念のもと、世界中から高校生（約100名強）が集まり、座学や身体活動を通して学び、交流を深め、次代の人材を育てる目的で、2年に一度「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」が開かれています。2011年8月に北京で開かれた第8回大会に、本校ははじめて招待され、2名の生徒が参加し、高い評価を受けました。

第9回はノルウェーのリレハンメルでの開催です。再び招待された本校から、2名の生徒を派遣します。趣旨に賛同し、前向きにとらえ、意欲的に取り組もうとする人の応募をお待ちしています。

記

【期 日】2013年8月11日（日）～18日（日） ※現地での滞在期間です

【会場・主催校】Norway Gausdal vidergaende skole - Pierre de Coubertin

【参加者】筑波大学附属高校生2名（学年・性別問わず）、引率教諭1名

【経 費】無料

※現地での滞在費は「国際ピエール・ド・クーベルタン委員会」が負担。渡航費は筑波大学が負担

【応募資格】

- 1) この活動の趣旨に興味を持ち、意欲的に取り組める者
- 2) 英語での簡単なコミュニケーションが可能な者
- 3) 若干の運動プログラムに参加できる者（短距離走や走り幅跳びなどがあります）

【応募方法】

興味ある者は10月22日（月）までに、本件担当の中塚義実（保体科）まで申し出てください。応募多数の場合は、国際交流委員会と保健体育科が中心になって選考に当たります。

【補足】

- ・同フォーラムの内容等は裏面の報告を参考にしてください。もっと詳しいことを知りたい人は、中塚まで尋ねてください。「オリンピズム」については、（財）日本オリンピック委員会（JOC）のホームページ<<http://www.joc.or.jp/index.html>>にわかりやすく書かれています。
- ・筑波大学とオリンピック教育の関わりについては、2010年12月に発足した「オリンピック教育プラットフォーム（CORE）」のホームページ<<http://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/>>をご覧ください。

II. 第9回大会の概要

1. 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムのねらいとあゆみ

国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムのねらいとあゆみは、右のスライドにあるとおり。

2007年のターボルで開かれた大会に田原さんが参加され、日本に紹介された。

田原: 私は20年以上前から国際ピエール・ド・クーベルタン委員会(CIPC)の委員になっていましたが、2006年～2007年ごろに理事になりました。それまではヨーロッパ中心でやっていただけ、いろいろな大陸からも参加してもらってあげていきたいということでした。理事になってはじめて、高校生対象のユースフォーラムがあることを知り、2007年に参加し、これは日本からも何とかして参加してほしいと思い、日本オリンピック・アカデミー(JOA)の機関紙に原稿を載せ、いろいろな形で広報するように努めました。ちょうど2016年の招致活動を東京が行っており、東京都ではオリンピック教育読本も作っていました。そこで東京都の教育長に打診したところ、都立国際高校をご紹介いただき、オブザーバーとして2名の生徒と引率教師1名が参加したのが2009年のことでした。しかし国際高校でオリンピック教育を継続的に進めていくのはどうも難しい。国際交流ならよいのだが、という話の中で、筑波大学が大学と附属学校で連携してオリンピック教育への取り組みを開始したことを聞き、筑波大学に依頼しました。

2. 第9回大会の概要

今大会の概要は右のスライドのとおり。

リレハンメルオリンピック会場と、隣町のガウスダールにあるクーベルタンスクールが主会場だった。

17か国から19校が参加した。生徒は、クーベルタンスクールから7名、オブザーバースクールから2名ということだが、国によっては8名のところもあれば5名のところもあり、参加生徒は全部で約100名ほどであった。ガウスダールの主催校か

国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム

◆ねらい

近代オリンピックの創始者「ピエール・ド・クーベルタン」の思想「オリビズム」を学び、異文化理解・国際交流に貢献する人を育てる。

「オリビズム」とは ... “身体”と“精神”と“知性”の調和のとれた人間を育て、国際理解・国際平和を進めていこうという人生哲学。

「オリンピックの価値」は ... 卓越(Excellence)、友情(Friendship) 尊重(Respect)という言葉で表現される。

◆これまでのあゆみ

第1回 1997年 ル・アーブル(フランス)

第2回 1999年 マッチ・ウェンロック(イギリス)

第3回 2001年 ローザヌヌ(スイス)

第4回 2003年 アレンツァーノ(イタリア)

第5回 2005年 ラートシュタット(オーストリア)

第6回 2007年 ターボル(チェコ共和国) ... 日本に紹介

第7回 2009年 オリンピア、パルニ(キルギスタ) ... 都立国際高校が参加(日本として初)

第8回 2011年 北京(中国) ... アジア初開催。筑波大附高が日本代表として初参加

第9回 ノルウェー大会の概要

【期 日】2013年8月10日(土)～18日(日)

※8/9am11:40成田発～8/20am9:30成田着(約15時間のフライト)

注)飛行機の遅れにより、予定より帰国が1日遅れた

【会 場】主会場:リレハンメル(1994冬季五輪会場)

主催校: Gausdal videregaende skole - Pierre de Coubertin

【参加国】オーストラリア、オーストリア(2校)、中国、チェコ、エストニア、ドイツ(2校)、イギリス、ギリシャ、イタリア、ノルウェー、ロシア、スロバキア(ここまではクーベルタンスクール。各校7名)

キプロス、日本(筑波大附高)、ケニア、モーリシャス、マレーシア

(斜体下線はオブザーバースクール。各校2名)

※17か国19校。参加生徒100名、スタッフ20名、ボランティア30名余

【本校からの参加】生徒: 皆川侑子(3-2)、加納時定(2-5)

引率教諭: 中塚義実(保健体育科)

ら約 30 名がボランティアとして関わってくれた。前回、前々回の参加者もおり、細部にわたって気配りの行き届いた運営だった。

3. 参加国・参加校

【参加国・参加校】

<クーベルタンスクール>

- **Australia** **Winners of the Australian Coubertin Award**
- **Austria** **Pierre de Coubertin Bundes-Oberstufenrealgymnasium,Radstadt**
- **Austria** **Don Bosco-Gymnasium, Unterwaltersdorf**
- **China** **Beijing High School Four Pierre de Coubertin**
- **Czech Republic** **Gymnázium Pierra de Coubertina, Tábor**
- **Estonia** **Ülenurme Gümnaasium, Ülenurme**
- **Germany** **Pierre de Coubertin-Gymnasium, Berlin**
- **Germany** **Pierre de Coubertin-Gymnasium, Erfurt**
- **Great Britain** **William Brookes School, Much Wenlock/England**
- **Greece** **1st Gen. Lyzeum Pierre de Coubertin, Pallini (Athens)**
- **Italy** **Liceo Statale “Giuliano della Rovere”, Savona**
- **Norway** **Gausdal videregaende skole - Pierre de Coubertin**
- **Russia** **Middle School No.211 Pierre de Coubertin, Sankt-Petersburg**
- **Slovakia** **Gymnásium Pierra de Coubertina, Piestany**

<オブザーバースクール>

- Cyprus **Pierre de Coubertin-Pancyprian Gymnasium, Nicosia**
- **Japan** **University of Tsukuba Senior High School at Otsuka, Tokyo**
- **Kenya** **Kipkeino School, Eldoret**
- Malaysia **Senior Methodist Girls School Kuala Lumpur**
- **Mauritius** **Winners of the National Coubertin Award organised by the Mauritius Pierre de Coubertin Committee**

<名簿に載っているが参加できなかった国>

- **Zambia**
- **Congo**

オーストラリアは、国内の州ごとに開かれるクーベルタン・アワードの優秀受賞者が派遣され、8つの州からの選抜なので8名が参加した。また、候補者が参加できなくなったなどの理由で、イタリアは5名、エストニアは6名と、フルメンバーで参加できないところもいくつかあった。

今回もイングランドからは、ウィリアム・ブルックス・スクールが誇らしげに参加していた。ここは、クーベルタンがオリンピック復興のヒントを得た「ウェンロック・オリンピック」を行っている町の学校で、その大会を始めた医師ウィリアム・ペニー・ブルックスの名前が学校名になっている。2012年ロンドンオリンピックのマスコットの名前は「ウェンロック君」だったが、こういうところにオリンピックのレガシーが刻まれている。

オブザーバースクールは2名の生徒と1名の教師。前回大会で本校は「Senior High School at Otsuka」とだけ表記されており、筑波大との関係も東京にあることもわからない、不親切なものだったが、今回は学校名の英文表記をこのように変えてもらった。

モーリシャスは1日遅れての参加だった。理由はわからない。ザンビアとコンゴは、名簿には載っていたが参加

できなかった。ビザの関係とも聞いたが、ケニアの先生は「費用の問題」を指摘していた。開催地での滞在費はCIPC持ちだが、往復の渡航費は参加者の負担となる（本校の場合は筑波大学の事業として派遣されるので、生徒本人の負担はない）。ザンビアやコンゴが参加できなかったのは、渡航費が捻出できなかったからだというものである。

ケニアもずっとオブザーバーの2名参加だが「7名を派遣するだけの予算がない」というのが一つの理由とのこと。また、CIPCとしてはクーベルタンスクール（つまり学校名にクーベルタンの名前を冠する学校）を増やしたいようだが、「ケニアの学校名にヨーロッパ人の名前を付けるのはあり得ない。植民地時代に逆戻りだ」とのこと。彼の学校はキプケイノ・スクール。「キプチョゲケイノさんというメキシコオリンピックでケニア人として初めて金メダルを獲得した方が創設した学校であり、今でもオリンピック教育を授業の中で実施しています」（岸卓巨氏のブログより）。

4. 主なプログラムとスケジュール

右のスライドのとおり。

社会貢献活動は、参加者がそれぞれの国で事前に行うもので、校長先生の証明書を持参する。スポーツ指導などのボランティアが多いが、本校からの参加者は干潟の清掃や近所の農家の手伝いをした。今回のトピックである「環境問題」に関連させる試みだった。

前回大会では5分間の学校紹介と7分間のアート・パフォーマンスがすべての学校に課され、特に2名のオブザーバースクールにとっては大きな負担だったが、今回は学校紹介の代わりに参加者名簿が配られ、アート・パフォーマンスはクーベルタンスクールだけに課せられた。オブザーバースクールはミニエキスポの中で、自分たちの国の文化やスポーツを表現するパフォーマンスを披露することとなった。本校生は剣道の型を披露することとし、準備を進めた。

スケジュールは、はじめのうちはかなりタイトで、後半にゆとりがあった。大雑把には次の通りです。

◆8/9（金）成田～コペンハーゲン～オスロ

約15時間の移動でオスロ市外に着いたのは夜の9時ごろ。ホテルへチェックイン

◆8/10（土）オスロ観光 → リレハンメルへ

簡易ゲームでリラックス

◆8/11（日）リレハンメル（於 Hakons Hall）

開会式→ 講義（ノルウェーの自然と生活/オリンピズムとクーベルタン）→ パナー作成&オリンピック博物館→ 歓迎パーティ

◆8/12（月）リレハンメル（於 Olympic Venue 等）

カーリング→ ボブスレー&アチェル&射撃&積木&小屋建て&迷路→ 集合写真（スキジャンプ台付近）
→ グループ討議①→ ミニエキスポ&バーベキュー<雨>

◆8/13（火）ガウスダール（於クーベルタンスクール）

スポーツテスト（50m水泳 or 100m走 or 砲丸投 or 走幅跳）→ 知識テスト → グループ討議② → アートパフォーマンス準備

◆8/14（水）ガウスダール（於クーベルタンスクール）

クロスカントリー → グループ討議③ → オリエンテーリング → アートパフォーマンス

主なプログラム

◆クーベルタン賞に関する活動◆

- 1) 知識テスト ... オリンピック、オリンピズムについての講義とテスト
- 2) スポーツテスト... 必修: オリエンテーリングとクロスカントリー
選択: 100m走・走幅跳・砲丸投・水泳から3種目
- 3) 社会貢献活動... 事前に行う、地域のボランティア活動
- 4) アートパフォーマンス ... 7分以内のパフォーマンス
- 5) グループディスカッション ... オリンピズムについての討論

◆ノルウェーの自然や文化に親しむ活動◆

- 1) ノルウェーの自然や文化... 国立公園でカヌー、野外バーベキュー等
- 2) ウィンタースポーツの体験 ... カーリング、ボブスレー等

◆文化交流活動◆

- 1) ミニエキスポ ... 各国のブースを設けて交流
- 2) リレハンメル市民に対するパフォーマンス ... ダンスなど

- ◆8/15 (木) ガウスダール山国立公園 (Kittilbu)
 伝統文化体験 (狩猟・採集 or 鉄器 or 博物館 or 乳製品) → 野外活動 (カヌー or 干草集め or 火起こし)
 → バーベキュー (ムースの蒸し焼き) → ダンスパーティー
- ◆8/16 (金) リレハンメル市街
 ダンスパフォーマンス → ショッピング → デイナー
- ◆8/17 (土) リレハンメル&ガウスダール
 ノルウェーのスポーツに関する講義 (教師)
 → パラリンピック種目等の体験 (アイスクン&槍投げ or アイスリッジ ホッケー or 卓球 or ボッチャ or 空手)
 → クロージングセレモニー → フェアウエルディナー (教師は山の上の別荘で懇親会)
- ◆8/18 (日) AM1:00 頃 第一陣出発
 AM5:00 頃第二陣 (我々含む) 出発
 AM6:30 頃 オスロ空港着 → オスロ市内観光
 13:45 発 (14:55 コペンハーゲン着) 予定だったがトラブル発生。出発は 14:30 過ぎでコペンハーゲン着は 15:40 頃
 15:45 発成田行きには間に合わず! もう 1 泊することに!
 18:00 ホテル着
- ◆8/19 (月) コペンハーゲン
 8:00~
 11:00 頃 人魚姫
 12:00 過ぎ 衛兵交代を少しだけみる
 13:00 頃 空港着
 15:45 発 成田へ向けて出発!
- ◆8/20 (火) 機内~成田~都内
 9:00 過ぎ 成田着
 10:30 過ぎ 解散
 高校選手権地区大会決勝だったが... 自宅で休養後...
 18:00 大修館書店にて「体罰」問題の座談会
 20:00 過ぎ 懇親会

Ⅲ. 第9回大会の実際

◆8/8 (木) まで 一蹴球部の合宿

8/4~8/9 は茨城県神栖市波崎の「リゾートインあおの」にて 5 泊 6 日の蹴球部合宿。サッカー部、フットサル部、女子蹴球部あわせて 70 名前後の合宿であるが、最終日は同僚の先生や卒業生のスタッフ陣にお任せして、8/8 の午後の練習試合を途中までみて帰京した。

合宿後も、サッカー部は 8/12~8/20 まで全国高校サッカー選手権大会第 2 地区予選。決勝まで残ってくれば帯同できるが、あとは無理なので、他の先生や OB をお願いした。またフットサル部も 8/17~8/18 と第 13 回東京都フットサルチャレンジ U-18 に出場する。この大会の実施委員長は、東京都サッカー協会フットサル委員会第 2 種部会長である私。こちらもお願ひした。夏休みにノルウェーに出かけるために、いろんなことを調整しなくてはならない。

8 月 8 日の夜は、最後の荷造りに精を出した。

◆8/9 (金) 移動一成田~コペンハーゲン~オスロ

朝 9:40 成田空港第 2 ターミナルに集合。両家族と、附属学校教育局の今井さん、そして近畿日本ツーリストの

宮下さんが見送りに来てくださった。

剣道の型の披露で用いる「模擬刀」を飛行機で送ることができるかが一番のポイントだったが、成田空港の段階でしっかりチェックしてもらえたので、現地ではほぼ問題なく対応できた。

11:40の定刻に飛行機は動き始めたが、すぐにストップ、元のポジションに戻る。機内放送によると、機械トラブルがあったので点検が必要とのこと。約1時間遅れで改めて離陸した。

そこから約12時間。コペンハーゲン空港へは日本時間24:10、現地時間で17:10に到着した。オスロ行き飛行機は17:45発なのでまっすぐ次の搭乗口へ。入国審査もスムーズにいき、何とか間に合った（電光掲示板の表示は「CLOSING」となっていた。ぎりぎりセーフ）。

18:10、コペンハーゲン空港離陸。ちょうど1時間でオスロ空港着。荷物のピックアップに時間がかかり、空港直結の鉄道でオスロ駅前に着いたのは21:30ごろ。けどまだ明るい。ホテル「BEST WESTERN BONDEHEIMEN」は、中心街にある落ち着いたホテルですぐわかった。荷物を置いて、生徒2名を連れて軽く食事に出かけ、戻ってきたのが現地時間の23:00過ぎ。とても長い一日が終わった。



◆8/10(土) オスロ観光 → リレハンメルへ

見知らぬ土地へ出かけるとジョギングをする習性がある私は、6時前に起きて走り出した。走り出したら日が昇ってきた。走るとわかるが、このホテルはほぼ町の中心部にあり、王宮前広場を経て少し先には海が広がっている。近代的な建物と古い建物が混在しているオスロの町は美しい。人通りの少ない朝は気持ちがいい。

午前中はオスロ観光。「オスロパス」を手に入れる。バス、トラム、船など乗り放題で博物館の入館料もただ。270クローネで24時間有効のものを3名とも購入した。

アーケル・ブリゲというお台場のようなところを散歩し、ノーベル平和記念館やオスロ市庁舎（ノーベル賞の授与式が行われる）を見て歩き、海のほとりのお城へ行った。城の中には戦争の博物館があり、ナチスに対してノルウェー市民がレジスタンス運動を行っていた様子が紹介されていた。人類の歴史はほとんどが戦争の歴史と言ってもいいが、日本で学ぶのとは別の戦史が印象的だった。生徒たちも興味を持っているようだった。船に乗って民俗博物館へも行って見たが、時間切れ。バスで市内に戻り、ホテルで荷物を受け取り、オスロ市駅へ。

待ち合わせていた田原先生と合流し、15:34オスロ発、17:48着の電車でリレハンメルへ向かった。

車内はとてもきれい。そして車窓も美しい。途中から左側はずっと湖（または大きな川）の景色が続く。ノルウェーで最も大きい湖だということはあとで聞いた。

17:48リレハンメル着。ガウスダール校の先生とボランティアが車で迎えに来てくれていた。

1週間生活する宿は「Birkebeineren Hotel & Apartments」というところ。生徒と引率教員は、コテージ風の建物で共同生活。私の同室は、エス



トニアのオレフさんと、ギリシャのコスタスさん。

生徒たちはさっそくボランティアスタッフのリードで、アイスブレイキング。夕食は部屋ごとに配給されているパンや野菜、冷凍ハンバーグや缶詰などを調理する。オレフさんとの夕食だった（コスタスさんは、生徒の荷物が届かないという問題の対応に追われていた）。

◆8/11（日） リレハンメル（於 Hakons Hall）



コテージのすぐ先にハーコンズ・ホールが見える。
ここは1994年冬季オリンピック会場



ホール内ではじめて全員がそろったところ。
まずはノルウェーの自然と生活・スポーツの講義

生徒たちは7:00起床で、ボランティアスタッフのリードにもとで鬼ごっこなどの体ほぐし (Work out)。その後、部屋で朝食。教師は朝食後に打ち合わせ。初顔合わせなので簡単に自己紹介した。前回の北京に来ていた先生がほとんどで、懐かしい。

この日は一日、オリンピック会場のハーコンズ・ホール周辺で過ごすプログラム。オリンピック施設はホテルのすぐ隣なので、行き来できて便利。

8:30 からハーコンズ・ホールで簡単な開会挨拶の後、さっそくノルウェーの自然と生活、歴史、スポーツなどについての全体講義。続いてグループに分かれて、クーベルタンの足跡とオリンピズムについての講義を、ドイツ・エアフルト校のイネスさんから受けた。日本語で田原さんから聞いていた内容だったので、生徒たちにも理解しやすかった様子。

12:00からはフォーラムバナー制作。今回は世界遺産登録の富士山はもちろん、東京オリンピック招致委のシンボルマークも描いた。主に皆川♀が描き、加納♂が塗るという作業分担であった。



昼食をはさんで午後はオリンピック博物館見学。ハーコンズ・ホールにある立派な博物館で、すべての夏冬大会を網羅した展示が印象的だった。

18:00からのオープニングセレモニーは、フォーマルまたはトラディショナルな服装でとのリクエスト。本校の生徒たちは学生服で参加した。

開会セレモニーを終えて食事を楽しむ。ノルウェーの音楽やダンスの披露もあった。そのうち人が入り乱れて交流会。最後は生徒たち全員でダンスパーティ。食後の身には厳しくハードに感じるノルウェーのダンス。グループで踊るギリシャのダンス。若者のアップテンポなダンス…。高校生のダンスパーティはいつまでも続く。教師のミーティングがその合間に開かれ、初日が終わった。

コテージに戻り、洗濯・シャワーなどをやり、Eメールのチェックなどを行っているうちに夜も更け、床に就いた。



オープニングセレモニーでの一コマ。各国の高校生。

◆8/12 (月) リレハンメル (於 Olympic Venue 等)

生徒は7:00起床でワークアウト。

我々教師もその頃起きて各部屋で朝食。朝はオレフさんが大好きなコーヒーを入れて「コフィ」と嬉しそうに告げる。私は目覚まし時計をテーブルの上に置く。同室仲間との生活スタイルが徐々に定着していく。

この日から、朝食の際にランチボックスにパンやハムやチーズや野菜を詰めて昼食用のランチパックを持参するのが基本形となる。

まずはハーコンズ・ホールの隣にあるアイスアリーナでカーリング体験。午前中のプログラムは、多国籍グループで過ごした。私のグループの高校生は、イングランド♀、イタリア♂、ドイツ♀、オーストリア♀、イタリア♀、キプロス♀、それにノルウェーのボランティア♂、イタリアの先生♀、そして私。初体験のカーリングを通して、世代・性別と国境を越えた仲間意識が芽生える。

次に出かけたボブスレーコースでは、ボブスレー体験はもちろん、グループでの野外活動を存分に楽しめた。アーチェリー、射撃、グループで木片を動かすゲーム、グループで家を作るゲーム、迷路、そしてボブスレー体験…。十分楽しんだ。



多国籍軍でカーリング体験中



ボブスレー体験。90km のスピードは迫力満点！



4人乗り。スタッフが先頭に乗ってくれるので安心



森の中のアーチェリー



メンバーで木材を運び、家をつくる。玄関と窓があるのがポイント。



グループのメンバーで木片を動かして縁に乗せる。
コミュニケーションが重要！

スキージャンプ台へ移動し、全員で記念撮影。上からの眺めがすばらしかった。

予定ではそこから歩いて宿へ戻るようになっていた（歩いて戻れるほどの距離）、時間が押していたのでバスで戻るようになった。



スキージャンプ台からみたオリンピック会場の様子。右の白屋根がハーコンズ・ホール。右奥がスケート場。中央に陸上競技場とサッカー場がある。写真の外、左の方向に宿舎のビルケバイネレンホテルがある。

午後はコテージでディスカッション。トピックは「Acting Through Sport.」。生徒の感想には、「はじめは自分の意見をはっきり主張できる同年代にビックリし、圧倒されてしまった」とある。



この日の夕方は、今回の見せ場である「ミニエキスポ」。テーブル1台分のスペースに、それぞれの国を紹介するものを並べ、お祭り感覚で交流を図ろうという企画。2年前の北京大会で初めて採用されたが好評で、今回は早い段階での実施となった。

夏祭りのイメージで事前にいろいろ準備した。竹とんぼやコマ回し、ヨーヨー釣りなど、けっこう楽しめるものが多く、立ち寄ってくれた人には好評だったが、あいにくの雨となり、どのブースも大混乱。気温も低く、長時間のんびりと祭りを楽しむという気分ではなかった。

オブザーバースクールは、ミニエキスポの中でパフォーマンスを披露することになっている。皆川・加納は二人とも剣道部員なので、剣道の型を披露すべく、事前に練習をしてきた。一番のネックは模擬刀を飛行機で送ることができるかどうかだったが、これも前記の通り無事届き、万全の構え一少し寒かったが一でのパフォーマンスとなった。

キプロス、ケニア、マレーシアは、いずれも音楽に乗って踊りを披露するというもの。ケニアの踊りはみんなを引き込むものであった。

それに対して日本のものは異なる。音楽はない。静寂の中で、彼らの動きが始まる。ナレーションを英語で入れることにした。「150年前、クーベルタンが生まれた。そのころの日本は“ラストサムライ”の時代。いまでは侍はいなくなったが、侍の精神は剣道に残っている。動作だけでなく、精神を感じてほしい」という趣旨のコメントである。伝わったかどうかはわからないが、悪くはなかっただろう。初めて見る剣道に、多国籍の参加者たちは興味津々。他の国のように音楽を流してにぎやかに踊るというのではないが、これはこれで日本の良さを見せることができたのではないか。

オブザーバースクールによるパフォーマンスの時間が終わり、一段と雨がひどくなってくる。野外バーベキューの予定だったが、テントの中で調理したものを順にとっていく形となり、それぞれの部屋で食事をした。

この日からほぼ毎日、643号室では夜のティーチャーズミーティングが開かれることになった。オレフさんがエストニアの酒を持ってきていた。「テルヴィセクス」というのがエストニア語の「乾杯」らしい。ギリシャのコスタスさんと、あとはケニアのロジャーさん。このあたりが夜のひとときを過ごす“仲間”となっていた。

◆8/13 (火) ガウスダール (於クーベルタンスクール)

この日は一日中、隣町のガウスダールにあるクーベルタンスクールで過ごす。だからランチパックは必須。朝も昼も同じという食事パターンにはそろそろ飽きてきた。

加納が水泳を選択しているのも、プールへ行くグループとともに一足早く出発。木をふんだんに用いた体育館(ハンドボールコートが常設)が待合室になっている。「ここは学校の施設か？」とボランティアに尋ねると、「学校でも使っている」という答え。学校と地域のデュアルコースは、このあといたるところでみられた。

プールは地下に25m×5コース程度のこじんまりしたものである。が、その横にあるサブプールにはウォータースライダーがあり、プールサイドはゆったりくつろげるスペースで、ピザやホットドッグを売っている売店が常設されている。建物の外にはもう一つ屋外プールがあり、滑り台があって楽しめる。そしてその脇には芝生のサッカー場。夏休みだからか、平日にもかかわらず、少年サッカーが始まろうとしていた。



ドイツの高校生にコマ回しを教えているところ、ちなみに浴衣を着るのは、前回のコースフォーラム以来。



剣道の型の披露は、みな興味津々だった。けど寒かった。

水泳を選択した者は、50m 自由形が課題。日本でこういう形でやると、選択するぐらいだから相当泳げる者が集まってくるのだろうが、ここはそれほどでもない。泳ぎ方は不恰好だし、途中で足をつく者、おぼれて完泳できない者までいる。加納はよくできた方だが、一緒に泳いだ中では2位だった。1位はオーストラリアのサイモン君。「君はスイマー？」と聞いてみると、「いや、陸上をやっている。昔は水泳をやっていた」とのこと。スポーツテストで彼は目立っていた。

水泳チームとともにバスで移動して、いよいよガウスタールのクーバルタンスクールに到着。校舎から道を隔てた反対側に、立派な陸上競技場がある。そこではすでに、100m 走、砲丸投げ、走幅跳がローテーションで進められていた。皆川は砲丸投げを終え、100m 走に臨むところだった。中学時代は陸上競技をやっていた皆川は、「陸上のスパイクを持ってきたらよかった」と後悔していた。

やはりオーストラリア勢が、どの種目も強いと感じた。各州から選ばれてくるのだから当然だろう。日本の二人も平均的には力を発揮できているが、走り幅跳びをあまり練習してこなかった加納、中学時代陸上競技部だったのでスパイクを持っているのに今回持ってこなかった皆川。ともに悔いの残るものだったようだ。

ちなみに標準記録は次のとおり。

50m 水泳 … 男子 47 秒、女子 52 秒

砲丸投げ … 男子 7.5m、女子 6.5m

100m 走 … 男子 14 秒、女子 16.5 秒

走幅跳 … 男子 4.3m、女子 3.4m

陸上競技場の中は天然芝のサッカー場、土手の上には人工芝のサッカー場がもう一面あり、小学生の子どもが4人ほどボールを蹴って遊んでいた。ユニフォームはメッシ。世界中のアイドルである。

昼食をグラウンド脇のベンチでとったあと、校舎内へ入る。5月にできた新築校舎は、きれいなだけでなく、ところどころアートがちりばめられていて楽しい。

立派な図書館は地域住民も利用している。二つある体育館は、木材がふんだんに用いられている。ノルウェーではどの建物も木材が用いられていてあたたかい印象を持つ。ハンドボール仕様になっている方の体育館には、地域のハンドボールクラブの伝言板らしきメッセージがある。地域クラブもここを利用しているようだ。学校施設を地



100m 走の様子。タイムは機械計測であった。

域が使う。日本でも取り入れるべきヒントがここにはある。「学校が地域に貸してあげる」というよりも、「学校は地域社会からお借りしている」という感覚が必要だろう。

教師用のくつろぎスペースもある。この学校の先生も、あき時間などはこのラウンジでくつろいでいるそうだ。こういうスペースがうらやましい。

14:00からは知識テスト。その前に教師の打ち合わせがあり、知識テストで質問が出たときの対応など、共通理解を持った。固有名詞などでわからないものは、それぞれの国の言葉で言ってあげてよい。しかし正解は言ってはならない。当たり前である。

知識テストは30分ぐらいで終わるとの話だったが、たっぷり1時間はかかった。ギリシャの神様を答えさせる問題は北京のときと同じだが、今回は各大会のマスコットを答えさせる問題など、マニアックな内容が目立った。「これがオリンピック教育?」と、少し疑問も感じた。

少し休んで15:30からグループ討議の2回目。前回はコテージでやったので、自分たちのすみかでのどのように為されているのかよくわからなかったが、今回はグループごとに部屋が与えられている。討論できる環境ではあった。トピックは「Environmental Impact of Sport」ちなみに、トピック1の「Sustainable Development and Closeness to Nature」は、事前にA3判3枚程度のポスターを作っておくことになっており、図書館のまわりに掲示された。

グループ討議への取り組みは、班ごとにまちまちのようであった。皆川の属する班は、いつも最後までみっちり議論をしている。どの程度「濃く」話しているのかは知らないが、いつも遅くまでかかっていた。一方で加納の属するグループは、けっこうさっさと終わっていた。特にこの日は、なぜかコストスさんがグループの輪の中にいる。よく見るとそこにいるべきギリシャの男子生徒が参加しようとしぬのか、代わりにコストスさんがしゃべっている感じ。ギリシャの子はそのうちどこかへ行ってしまった。

あとでコストスさんが言っていたのは、「朝からスポーツテスト、知識テストで、休む間もない。うちの子には



ガウスダールのクーベルタンスクール。5月に新築された。



ハンドボール仕様の体育館。地元クラブも使っているようだ。



吹き抜けのホール。食堂でもあるし集会スペースでもある。そしてゴミ箱のアートが…

休みが必要なんだ」とのこと。確かにハードではあったが、「がんばれや！」と言いたくなるころ、彼らは休めというようだ。興味深かったが、こういう姿勢が、ドイツ人が仕切るこのフォーラムおよびオリンピック教育の文脈で受け入れられないのだろう。文化の違いは大きい。

ようやく待望の夕食。生徒ホールのような吹き抜けのスペースは、実は食堂でもあった。シャッターが開くと、そこには厨房があり、おじいさんやおばあさんがキッチンに。ガウスダール校の先生曰く、「地元の方が作りに来てくれる」のだそうだ。そして並ぶ地元の料理。損赤に待望の御飯が！これはうれしかった。ここへきてからずっとパンばかりだったので。やはり半世紀もなじんできたごはんは、私にとっては不可欠なのだろう。

食事の後は、アートパフォーマンスの準備となっているが、これはクーベルタンスクールのみ。オブザーバースクールの生徒および順番待ちの生徒たちは体育館で自由に遊ぶ。この頃になると、オブザーバースクール同士がつるむようになり、スタンドからみていると、マレーシア、キプロス、日本、ケニア、モーリシャスあたりが一緒に動いている。

一方、教師の側も、待っている間にいろんな人と話ができおもしろかった。学校はいつ始まるのか、どんな学校なのか、体育の時間は何をやっているのかなど、つたない英語でいろいろ情報交換した。「日本では夏休みに宿題が出る」ことを言うと、彼らは一様に驚いていた。9月始まりの彼らにとって、夏休みは学年末にあたる。本当に休むのだろう。ちなみにガウスダールの学校は夏休みの最後の週。ユースフォーラムが明けた月曜日から新学期が始まるとのこと。先生方やボランティアは大変だ。けどボランティアの生徒はその分冬休みが多くもらえるという話も聞いた。

バスでレハンメル の宿へ戻ったときにはすでにいい時間になっていた。

教師のミーティングを軽くやって床に就いた。



図書館のガラスには、事前につくってきた各国のポスターが掲示された。



仲良く食しているのはオブザーバースクール同士。



地元のおばさんが料理しに来てくれる。おいしかった！

◆8/14 (水) ガウスダール (於クーベルタンスクール)

朝早くからバスに乗って、クロスカントリーの出発地へ。男女とも同じコースで、3km の森林コースらしい。

9:00 に男子がスタート。その10分後、女子がスタート。そのままコースをたどって行くのもよかったが、男子のゴールインを見たいので、マイクロバスに乗ってゴール地点の陸上競技場へ向かうことにした。けどすでに男子のトップはゴールインしていた。加納もがんばったようで、すでにゴールインしていた。

ひと休みの後、11:00 からは最後のグループ討議。テーマは「A World of Difference」。



男子のスタート風景。森の中を約3km走るコース。



ノルベルト・ミュラー氏(CIPC 会長)に CORE の冊子『オリンピック教育 Vol.1』をお渡しした。



グループ討議の様子。英語でやりとりする。

生徒たちは非常にタイトなスケジュールで動いているが、教師にはゆとりがある。校舎内にある教師のラウンジは、空き時間にコーヒーやお茶を飲みながらくつろげるスペース。昼食のランチパックを広げながら、コミュニケーションの場を楽しんだ。

14:00 からはオリエンテーリング。天気も素晴らしく晴れ渡ってきた。スケジュール的にはハードだが、生徒たちは体調を崩すこともなく、しっかりとついてきている。さすがである。

3人一組のグループ (もちろん多国籍) で、学校周辺に設置されたポストを回ってくる。ここではしょっちゅうやっているからか、オリエンテーリング用の地図と、ポイントでチェックするためのカードが用意されている。運営も手慣れたものである。



教師のラウンジにて互いの国の挨拶を紹介しているところ。ここはゆったりしていて居心地がいい。

教師は参加してもしなくてもよかったが、せっかくなのでオレフさんを誘って参加することにした。オレフさんは走れるような体型でない（失礼…）ので、ゆっくり歩きながら、散歩しながらのオリエンテーリングは非常に気持ちのよい時間であった。

17:00からはアートパフォーマンス。夕食をはさんで22:00ごろまで行われた。どのグループもよく工夫されている。しかし心に響くようなものはなかった。イタリアの発表がクロージングセレモニーで再演する資格を得たが、「最優秀」というわけではなかった。甲乙つけがたし、あるいはどっこいどっこいと言った感じだろうか。



オレフさんとオリエンテーリングに参加



エアフルト（ドイツ）は環境問題を意識した寸劇だった



学校周辺の景色。緑が多い



イタリアのパフォーマンスは、体を駆使したものだった



民家もみなゆったりしていてうらやましい

◆8/15（木） ガウスダール山国立公園（Kitilbu）

好天に恵まれ、絶好のアウトドア日和である。9:00に出発。バスに乗って、ガウスダールの学校をさらに越え、山の方へ向かっていった。目的地はキティルブーという、山の上にある国立公園である。山の上と言っても険しい山が連なっているわけではない。湿原近くの丘陵地帯と言った感じ。尾瀬のようでもあるが険しくはない。

10:00ごろ、キティルブーのミュージアムに着いた。ここからは4つのグループに分かれていろいろ体験する。

- 1) 狩猟・採集時代の暮らし体験 … 火の起こし方と焼石を用いた湯沸し。石器で毛皮を切り裂く体験など
- 2) 博物館の展示見学 … この地域とムースの生態など
- 3) 鉄器制作とムースの捕獲 … 砂鉄から鉄器を作る作業見学。ムース捕獲の落とし穴は大規模な仕掛けだった。
- 4) 伝統的な住居と乳製品 … できたてのチーズやバターがおいしかった



狩猟・採集時代の生活体験



博物館でムースの説明を聞く



鉄の製造はノルウェーの発展の重要な要素



昔ながらの農家の風景。チーズやバターを作っている

ひととおり回り終えたところで、お楽しみの昼食の時間。ノルウェーの伝統料理である。薄くて堅いパンに、ムースのハムやチーズを乗せて食べる。スープがおいしかった（何のスープかは忘れた）。

午後はまた、農作業体験（干草集め）、グループで火を起こしてヤカンを沸騰させる競争、そしてカヌー体験と、実に楽しいアウトドア体験の連続だった。我々教師も好きなところに参加しながらいろいろ体験した。



薄いパンに、いろいろつけて食べる。



干草刈りはケニアのロジャーさんが上手。



グループでお湯を沸かす競争。



カヌー体験。すばらしい自然



夕食のメインは、ホイル蒸しにしたムースの肉

気がつくともう夕食どきになっている。ムース肉のホイル蒸しがこの日のメイン。地中から掘り出してがつつやるさまはみていて気持ちがいい（気持ちが悪くなる人もいるかもしれない）。これにコショウを振って食べるのだが、これがうまい！ 夕食は大満足だった。



そのあとは、恒例のダンスパーティー。アコーディオンを持つのはロシアの生徒と地元のおじさん。柔らかい音が

耳にやさしい。ウェルカムパーティで披露されたハードなノルウェー・ダンスがここでもまた披露される。その他各国のダンスを紹介しつつ、踊りまくる。日本人を含めたアジアの連中は（私も含めて）、踊りの輪の中に積極的には参加しない傾向がある。踊り文化は欧米のものなのだろうか…。



伝統的な農家の前で、全員で記念撮影。とても気持ちのいい一日だった。



最後はいつもダンスパーティ。アコーディオンにあわせて踊りまくる欧米人

リレハンメルのコテージに戻ったのはけっこう遅い時間だったが、ロジャーさんの部屋で大人のミーティングが開かれた。昼間、リレハンメルの町中へ出かけたときに、いろいろ買い込んだらしい。

私が参加したのは 23 : 30 ごろ。すでにロジャーさん、オーストリアのヴォルフガングさん、ノルウェーのスタインさん、それに 643 号室からコストスさん、オレフさんがおり、男の引率教員は全員集合となった。かなりおもしろかったが、正直、よくわからないくせに笑っている場面もあって情けない。コストスさんとロジャーさんはよくしゃべる。ヴォルフガングさんも、おもしろいジョークを知っている。スタインさんも、地元ネタで盛り上げる。私がときどき「日本では～」という話題を提供するとみな面白がってくれる。もっともっと投げかけたいと思った。

どうやら私以外の人たちは、過去のユースフォーラムやロンドン五輪の際に開かれたセミナーなど、どこかでつながりがあるようで、共通の知人の名前がよく出てくる。中でもフランスの先生（シシルと言っていたと思うが）の名前がよく出る。

1 : 00 ごろ解散。自室に戻って「おやすみ」になった。充実の一日だった。

◆8/16 (金) リレハンメル市街

7 : 30 頃起床。朝から小雨が降っている。話が二転三転した（わけではないがこちらの理解が不十分だったためよくわからなかっただけ）ので何を着ていくのかに迷った。結局この日も伝統的な衣服でパフォーマンスをすることのようだった。日本は例によってはかま姿で剣道の型披露。私も浴衣を着ていくことにした。今回はリレハンメル市民に対して、世界中から高校生が集まってオリンピック教育をテーマにいろいろやっていることを紹介する意味合いもあったようだ。

コテージから歩いて 15 分ぐらいで、市の中心街のようなところに出て来た。たぶんここがメインストリートなのだろう。そしてその一角に、イベントができそうな少し広めのスペースがあり、そこで各国がダンスパフォーマンスを披露する。と言っても日本は例によって観賞用のパフォーマンス。他とは少し異なる。

今回は持ち時間も少なかったのも、剣道の型も、前回より少し短いバージョンだった。しかし前回以上に注目を集めたような気がする。一般市民がいたからというのはもちろんだが、この日からナバセルさんはじめ、CIPC の理事の方々が参加されたこともある。ナバセルさんやミュラーさんからは、日本の剣道の型は絶賛されたが、世界

の高校生がどう感じたのかはよくわからない。日本でもそうだが、にぎやかに踊る方が好まれるのかもしれない。

とにかく踊るということに関しては、世代の違いもあるだろうが、欧米と日本の違いをすごく感じる。二人ペアになって踊る習慣が日本人にはそもそもない。次回はせめて盆踊りでも仕込んでおくか…。

午後になってようやくお土産を買う時間が取れた。一度コテージへ戻り、軽く昼食をとってから着替えて出直すことにした。皆川、加納と出かけたが、こちらもゆっくり回りたいので、買い物自体はそれぞれで、ひととおり買うものは買い、一足先に宿へ戻った。高校生2名がその後どうしたのかはわからない。



市の中心部にある広場。ここでパフォーマンスやダンスをしてリレハンメルの方々に披露した。



ギリシアの高校生たちと。この日もまた伝統的なコスチュームを身にまとう。

買物を終えて少し時間ができたので、16:00過ぎから約1時間、ホテル本館にあるサウナを試してみた。宿泊者は無料で楽しめる。最初は機械がうまく動かなくて往生したが、16:20には「84度」になっているとのことで、実際のところ十分であった。北欧でサウナを体験したいという願いはかなえられた。

19:00からの夕食はホテルのレストランでディナー。おいしい料理をいただいた。

“夜のティーチャーズミーティング”は643号室。ロジャーさんが来た。そしていつものオレフさんとコスタスさん。いい仲間である。

「テルヴィセクス」「チアーズ」「乾杯」

そして「Our Friendship Forever！」

ユースフォーラムも最終日である。



夜の風景。オレフさん、コスタスさん、ロジャーさん。いい仲間である。

◆8/17 (土) リレハンメル&ガウスダール

7:00 起床、朝食。8:00 からは教師のミーティング。最終日のスケジュールと帰りのフライトの確認が為され、ノルウェーのオリンピック・パラリンピック委員会の方から、ノルウェーのスポーツに関する講義があった。短時間ではあったが、ノルウェーのスポーツ政策について知る貴重な機会となった。

9:00 から生徒たちは、ハーコンズホールとその隣のアイスアリーナ、および陸上競技場で、4つのグループに分かれてパラリンピック種目等の体験をした。教師も適宜参加した。陸上競技場では、視覚障害者の体験版として、

アイマスクをつけた槍投げやトラック競走を体験。車椅子の試乗もしていた。カーリング体験で利用したアイスアリーナでは、アイススレッジホッケーの体験と、別室でボッチャの体験をした。ボッチャは、ノルウェー代表としてパラリンピックに参加した肢体不自由の方がボランティアの援助を受けながら紹介していた。隣接するハーコンズホールではまず、車椅子卓球のノルウェー代表選手とナショナルコーチの指導のもとで卓球を、空手クラブの方の指導で空手を体験した。ノルウェーでは空手が盛んで、ここでも空手クラブが活動しているとのことであった。



陸上競技場にてナバセルさんとツーショット。『オリンピック教育』をお渡しした。



クーベルタン委員会理事の田原淳子さんもアイマスクをして槍投げに挑戦。



アイススレッジホッケーの体験



パラリンピックのノルウェー代表選手との卓球体験



ボッチャの体験風景



ハーコンズホールに空手道場がある。ノルウェーではかなり盛んに行われているようだ。

昼食をコテージでとってから、いよいよクロージングセレモニーのためガウスダールの学校へ移動する。

北京大会のときも本校から参加した生徒が「蛍の光」をピアノ伴奏する場面があったが、今回は皆川のピアノとスロバキアの生徒のフルート演奏がミュラー会長の提案で実現した。練習する時間がなかなか取れず、セレモニー前によく少くすく二人で練習する時間が取れた。日本の「もみじ」を演奏することになり、即席とは思えないほど上手にできていた。



ホールでのリハーサル風景



クロージングセレモニーのメインはクーベルタン賞の授賞式。学校ごとに呼ばれて壇上へ。



ガウスダール校の体育の先生方と。



日本、中国、マレーシア…、アジアのネットワーク。



引率の先生方と。



教師たちの晩さん会は、ノーベル賞作家の旧宅で。

セレモニーのメインはクーベルタン賞の授与式。本校の生徒は二人とも受賞することができてホッと一息といったところだろうか。アットホームな中でのクロージングセレモニーであった。ユースフォーラムのバトンはノルウェーから、2015年開催のスロバキアに渡された。2015年は9月に開催の予定である。

学校へ戻り、フェアウェルディナー。地元のおじさん、おばさんたちがふるまってくれるおいしい料理も最後である。夕食後は校舎外の景色のいいところで写真撮影会。我々教師も、思い思いにいろいろな人と写真に納まった。

生徒たちはその後、クロージングセレモニーが開かれたガウスダール・カルチャーセンターに戻ってダンスパーティ。最後まで踊りまくるようだ。その間教師たちは、リレハンメルからガウスダールへ続く道路脇の高台に見えるノーベル賞作家の旧宅に出かけた。その人の名はビョルンシュチュルネ・ビョルンソン Bjørnstjerne Bjørnson (1882～1910)。イプセンと並ぶノルウェーの代表的な作家で、1903年のノーベル文学賞受賞者である。ノルウェーの国歌「我らこの国を愛す」の作詞者でもあり、19世紀末から20世紀初頭にかけて彼のもとに多くの“同志”が集まり、各国の独立運動に影響を及ぼしたというような話を、館内の展示をみせてもらいながらお聞きした。「ビョルンソンはスロバキアの独立運動にもかかわった著名人である」ことをスロバキアの先生が言っていた。

晩さん会は、ビョルンソン宅の並びにある、丘の上の素敵なおレストラン。地元の食材をふんだんに使った、ここでしか食べられない数々のおつまみをほおぼりながら、おいしいワインをいただいた。至福のときである。

生徒たちと合流し、バスでコテージへ戻ったのは22:30すぎだっただろうか。早いグループは深夜1時にはオスロ空港へ向けて出発する。生徒たちも教師たちも、最後のひとときを惜しみつつ、荷造りに追われていた。

◆8/18 (日) リレハンメル～オスロ～コペンハーゲン泊

午前1:00頃の出発の場面では、多くの人が見送りに来て別れを惜しんでいた。涙ながらのお別れ風景はあるが、日本でみられるようなジメジメ感はない。私は第一陣を見送ってからひと寝入りした。

われわれは4:30集合の第2陣である。幸い、同室のオレフさん(エストニア)もコスタスさん(ギリシャ)も同じバスであった。

5:00頃にバスが出発。オスロ空港には6:30頃着いた。思っていたよりかなり早い。

そこでいよいよお別れであるが、すでにリレハンメルを離れているからか、このあと飛行機に乗るという作業のためか、比較的淡々とお別れした。

われわれの飛行機は13:45発のコペンハーゲン行である(14:55コペンハーゲン着予定)。まだだいぶ時間がある。雨が降っているうっとおしきはあったが、せつかなのでオスロに行くことを提案し、列車で出かけた。



雨のオスロ駅前。まだ朝7時ごろ



衛兵さんの仕事の合間に…

1週間ちょっと前にはじめて訪れたのと同じオスロ駅は、なぜかとても懐かしく、「帰ってきた」という思いを抱いた。生徒たちは「王宮へ行きたい」という。私は初日の朝のランニングですでに訪問し、そこが工事中で中には

入れないことを知っていたが、とにかく行ってみようということになった。王宮広場の裏側へ回ると、衛兵たちがおきまりのルーティンに励んでいる。時間が来たら「衛兵交代」もあるのだろう。仕事の合間に記念に写真を撮らせてもらった。

短時間で充実のオスロ観光を終え、空港へ戻ってきた。そして 13:45 発の飛行機に乗るべく準備していたが、なかなか搭乗開始のアナウンスがない。だいぶ遅れているようだ。1 時間ほどの遅れだろうか。するとコペンハーゲン空港への到着も 1 時間ほど遅れることになる。

機内でのアナウンスに従い、コペンハーゲン空港の担当窓口へ行ってみた。すでに 15:45 発の成田行きの搭乗手続きは終わっており、翌日の同時刻便で戻る選択肢を提示された。念のため他の可能性を探ってもらった。スカンジナビア航空の窓口の方は、パリ、フランクフルト、ミュンヘンなど、ヨーロッパから日本へ向かう便をいろいろ調べてくれたがすべて満席。お盆休み最後の日曜日だからだろうか。ホテル代、朝食&夕食代、空港とホテルの交通費などすべてスカンジナビア航空持ちで、もう 1 泊することになった。

サッカー部が勝ち進んでいたら、帰国当日が高校選手権東京都第 2 地区決勝戦のはずだったが、残念ながら決勝を前に敗退してしまったので、一日遅れでも大丈夫。私自身は「もう 1 泊コペンハーゲンで過ごせるんやったらその方がええなあ」と思っていた。二人の高校生は、はじめは何が起きたのかわかっていないようだった。皆川に至っては初の海外旅行である。「今日は帰れない」ことが確定し、最初は相当ビビっていたようだったが、こういうことはまああることである。保護者と連絡を取り、徐々に事情が把握できたときには、一日追加のヨーロッパ観光を楽しむ気分になっていたようである。

18:00 ごろにホテルに着き、レストランでディナー。その後は私の部屋に集まって、ユースフォーラムの写真をみたり、翌日の観光コースを相談し、それぞれの部屋に戻っていった。コペンハーゲンの夜はホテルでゆっくりと流れていった。

◆8/19 (月) コペンハーゲン半日観光～空港へ

朝は少しばかりドタバタした。高校生が二人とも、朝食の約束をしていた時間にやってこない。よっぽど疲れがたまっていたのだろう。珍しく二人とも寝坊してしまったようだ。

8:00 ごろホテルを出て、すぐ目の前の Femoren 駅から地下鉄で市内へ。週初めの朝の通勤ラッシュの時間帯である。けっこう込み合っていたが、もちろん日本ほどではない。

中心部の Nørreport 駅で降りて地上へ出てみると、自転車がやたらたくさん走っている。こんなにも多くの自転車を町なかで見たのは 1990 年の北京以来だと思った (1990 年のアジア大会後に「日中学校体育研究会」が天津市で開かれ、成田十次郎団長のもとで参加する機会を得た。天安門事件翌年の訪中には興味深いエピソードが多々あるがここでは省略)。けどあの頃の北京と決定的に違うのは、貧しくて自転車に乗っているのではなく、健康のためにあえて自転車 (「バイク」という方が適切か) を選択しているように見えるところである。通勤風景がかっこよく見えた。

ガイドブック情報によると、乗り捨ての貸自転車が随所にあるので便利とのことだったが、実際はあるべきところもなく、あまり機能していないように思えた。

すべて徒歩で回ることになった、ローゼンボー宮殿 (美しい。まわりの公園は憩いの場。脇には軍の施設があり朝礼をやっていた)、国立美術館 (改装工事中)、コペンハーゲン大学 (入口のみ)、地元の小学校 (この日から新学期。登校時だったからか門の中に入ることができた)、人魚姫の像 (行ってみたらどうってことはない。ありがち。



朝の通勤は自転車で！ コペンハーゲン中心街にて

やたら観光客が多かった)、カステレット要塞(星形をした典型的な西洋風の城塞。函館五稜郭ふう)、アメリエンボー宮殿(デンマーク女王が暮らしている)、フレデリクス教会(とても威厳を感じる大教会。アメリエンボー宮殿からの眺めは圧巻)、そして衛兵の行進(毎日12時に衛兵交代式がアメリエンボー宮殿であるらしい。衛兵はローゼンボー宮殿を出発し、市街地ど真ん中の道路を鼓笛隊の奏で行進曲に合わせて行進する。たまたまそこに遭遇した我々はラッキーだった)…。半日観光にしては主だったところをみて回ることができ、十分満足している。

Kongens Nytorf 駅から地下鉄に乗り、ホテルに戻って荷物をピックアップし、空港へ。13:00頃には空港に着き、準備万端。15:45に成田へ向けて無事に出発した。



ローゼンボー宮殿(一部工事中)



人魚姫の像。平日でも世界中からの観光客でにぎわう



アメリエンボー宮殿。デンマーク女王が暮らしている。奥はフレデリクス教会



ローゼンボー宮殿からアメリエンボー宮殿へ向かう途中の衛兵たち。毎日12時に交代するらしい。市の中心部の道路が衛兵交替で使われているのが新鮮。

◆8/20(火) 機内～成田～都内

朝の9:00過ぎに成田空港に着いた。時差が7時間(サマータイムあり)なので、乗っていたのは10時間あまりということになるのか。模擬刀がなかなか来ないのでしばらく待っていたが、前日の便で先に届いていたとのこと。10:00過ぎにはお迎えの保護者とも再会し、10:30過ぎに解散。長い「引率業務」から解放された。

この日は文京区の小石川運動場で、全国高校サッカー選手権大会東京都第2地区予選決勝をやっているが、筑波大学附属高校サッカー部は18日の準決勝で敗退。3年生の最後の公式戦を見ることができなかったのは残念。私自身にとってははしばしのオフとなったが、予定されていた仕事はある。18:00に大修館書店にて「体罰」問題の座談会。この模様は『月刊 体育科教育』2013年11月号に掲載されている。20:00過ぎに終わって懇親会。溝口紀子氏は静岡に帰宅したが、森川貞夫氏と編集部の川口修平氏で近くの居酒屋へ。久しぶりの日本の酒を堪能した。

IV. 生徒の感想

◆加納時定（高校2年生）

私は今回このユースフォーラムに参加して、多くのことを学びました。オリンピックの知識はもちろんのこと、それだけでなく、ノルウェーの文化や歴史、今まで知らなかったスポーツのこと、他国の文化、他国の人とどう意志疎通をはかるのかということなどを学びました。

最初は他国の人の英語力に驚きうまくやっけていけるか心配でした。しかし、毎日一緒に生活していく中で段々となれてきて、英語の表現力も上がり、それだけでなく、身振りや態度などで自分の意志をうまく伝える方法も身につけました。

フォーラムの中で私が一番刺激を受けたことは、外国の人のコミュニケーション能力の高さです。到着した当日皆がもともと知り合いであったかのように話をしていたことに驚いたのを今でも鮮明に覚えています。日本人がシャイなのだということを実感しました。

それと同時にこの中で一週間やっけていかないと行けないという意識から自然と私もオープンになっていき、最後のほうには知らない人とでもしっかり話が出来てもらえるほどになりました。

これは自分にとってとても大きな変化であり、今後の力になると思いました。

フォーラムの一週間は私にとってこれ以上ないほどの刺激であり、素晴らしい思い出です。また、世界各地に友達ができ、彼らと今でもメールやフェイスブックでつながることができ、それもまた非常に素晴らしい体験となっています。

これからも連絡をとりつづけいつか会える日を楽しみにしています。（2013年8月31日）

◆皆川宥子（高校3年生）

怒涛のように過ぎたあつという間の1週間だった。「オリンピック」というたった1つの言葉から、こんなにもたくさんの方へと派生した様に驚いている。今回の活動を通じ、純粋に自分はオリンピック、スポーツが好きなのだということをひしひしと実感できた。その場その場でなすべき課題を必死にこなしてきた訳だが、不思議と嫌だと思えることはなく、むしろ回数を重ねるにつれてもっとここを追究したいという向上心が芽生え、自ら調べ納得するという癖がついた。この探究心の獲得が今回のフォーラムを通して得られた1つの要であろう。あるものを与えられたらただ受け身になるのではなく、それをバネに自らをもっともっと飛躍させることができる人になりたいと思った。様々なプログラムを通す中でクーベルタンアワードを「とれたらよいな」から「絶対にとりたい」と自分の中で起こった心境変化はまさにその一例ではないだろうか。

さらに世界の高校生と比べ、自分には自己主張がかけられていると察した。いくら自分の中に明確で強い意志があっても、相手に伝わらなければ何も始まらない。相手に伝えることがスタート時点であるのだ。

参加資格を頂いてから約9か月を掛け準備をしてきたあれこれ。あの一週間のためにすべて行ってきたのか？と考え直してみるとどうやら違う気がする。積み重ねてきたことは今回のフォーラムに留まらず、今後生きる上での糧となること間違いない。フォーラムで得た各国の友達、異文化の新鮮さ、スポーツの素晴らしさ...決して色あせることのない一生モノの大きな何かをつかんだ気がする。（2013年9月9日）

V. 参加して感じたこと、考えたこと（中塚義実）

2011年の北京大会に初めて参加したときは、スライドにあるように、オリンピック教育がどういうものなのかということ、そして各国でどのように為されているかがある程度わかった。日本ではすでにやっていることだと感じたので、「オリンピック教育」と改めて言う必要があるのかということも感じた。

そして「今後へ向けて」として、国際交流事業にどう取り組むか、オリンピック教育をどう捉える、日本での、

日本からのオリンピック教育をどう捉えるかということを考え始めたのが前回であった。

国際PdCユースフォーラムに参加して(2011)

- ◆「オリンピック教育」で求められているものが、ある程度理解できた
- 1) クーベルタン賞を通して
各項目がクーベルタンの思想を反映→「オリンピック教育」の内容
- 2) プログラム全体を通して
 - ・異文化理解と国際交流 → 国際平和への貢献につながる
 - ・様々な活動の中で印象付けられる「オリビズム」
 - 例) クロスカントリーでの支え合い・助け合いを賞賛
 - 例) マナーに関する指導の中で「異文化をリスペクトせよ」との言葉
 - 例) クーベルタン賞は全員に授与されるわけではない!
- ◆各国の状況が、ある程度わかった
 - ・現状は、ヨーロッパ主導で「オリンピック教育」が展開されている
 - ・日本でできること、やっていることが多々ある→日本からの情報発信
※「オリンピック教育」と、改めて称する必要があるのか? =

今後へ向けて(2011)

- 1) 青少年の国際交流プログラムにどう取り組むか?
 - ・外国へ行ったとき、日本の何を、どのように伝えるか?
 - ・外国から来てくれたとき、日本の何を、どのように伝えるか?
 - ・諸外国について、何を、どのように学ぶか?
 - ・コミュニケーション能力について、何を、どのように学ぶか?
- 2) 「オリンピック教育」をどう伝えるか?
 - ・ここでいう「オリンピック」は「競技会」のことか、「理念」のことか?
→ “理念”を指す。しかし“競技会”をめぐる諸課題も取り上げたい
 - ・ここでいう「教育」は、青少年向けの営みなのか?
→ せっかく“スポーツ”という文化が、
教育から、青少年限定から解放されようとしていたのに...
 - ・「オリビズム」は、果たして人類普遍の真理なのか?
 - ・「クーベルタン」に集約してよいのか?
- 3) 日本での/日本からの「オリンピック教育」をどう伝えるか? =

今回は、もう一步踏み込んで考えた。つまり、日本で何ができるかということである。

クーベルタンスクールが集まってくるので、委員会としてはおそらくクーベルタンスクールを増やしたいのだろう。しかしはっきり言って、日本において、歴史と伝統がある学校がいまさら西欧人の名前を学校名に関することは考えにくい。

ケニアからは「キプケイノ・スクール」が毎回オブザーバーとして参加している。もう5回目ぐらいになる。ケニアのロジャー先生曰く「アフリカはヨーロッパ人に統治されていた側。ヨーロッパ人の名前を学校名に入れる

国際PdCユースフォーラムに参加して(2013)

◆日本で何ができるかを考えた...

1) 「クーベルタン・スクール」となることについては...

- ・歴史と伝統のある学校には、難しいんじゃない
- ・そもそも人物名を学校名とするのは日本の習慣に馴染まない?

2) クーベルタンの思想=嘉納治五郎の思想は、広めていきたい

- ⇒国内向けの「オリンピック・ユースフォーラム」をやりたい!
- ・国内の高校生を対象に“スポーツ”“オリビズム”を伝える場を
=オーストラリア型の導入

◆日本(人)の可能性と課題を考えた

- ・「シャイ」なのは語学力だけではない
- ・日本からの情報発信が必要!

170

のは考えられない」とのことであった。次回は7人のチームで来たいと言っていたが…。それぞれに事情があると感じた。

本校が「クーベルタンスクール・筑波大学附属高校」になるのは考えられない。あるとするなら「嘉納治五郎スクール」だろうか。しかしそもそも、人物名を学校名に入れること自体、わが国にはあまりないのでは…、と思つたら、十文字がそうだし、津田塾も…。いくつかある。

名称はともかく、クーベルタンの思想、それは嘉納治五郎の思想でもあるが、それは広げていきたい。2020年までの7年間だけでなく、これからもずっと続けていきたい。そのために、国内向けのユースフォーラムはできないだろうか考えた。国内の高校生を対象にした、オーストラリア型のフォーラムである。

もう一つ考えたのは、日本人の可能性と課題である。シャイなのは語学力のせいだけではない。国内にあっても、他校の生徒と交流する機会はあまりないのではないか。高校生は自分の殻の中に閉じているばかりで、外に行くチャンスが少ないのではないか。だからこそ、国内版のユースフォーラムには意義がある。

今後へ向けて考えたことは右のスライドのとおり。

現状認識として、まず、スポーツ界の改革は「待ったなし」の状況にあり、加えて9月7日以降、スポーツ界には「追い風」が吹いている。

「いつやるの？ いまでしょ！」という感じである。では、「誰が、いつ、何を」するのか？

JOA（日本オリンピックアカデミー）、JOC（日本オリンピック委員会）とはいまのところ関わっていない。CORE（筑波大学オリンピック教育プラットフォーム）に

は運営委員として、高体連には研究部活性化委員長として深く関わっており、全国研究大会での提言など、いろいろなことができそうである。各機関でできることはやっていきたい。

そしてそれらのつなぎ目の役割を、法人化したサロン2002が担うことができるのではないだろうか。

このあたりを踏まえて、全体で議論していきたい。

今後へ向けて(2013)

－サロン2002の可能性を踏まえて－

◆現状認識

1) スポーツ界の改革は「待ったなし」の状況にある！

・スポーツ指導・学校教育における「体罰」・暴力・ハラスメント問題に社会全体が注目している！

・100年以上続いてきた日本のスポーツ環境を“本気で”見直すとき

2) スポーツ界に「追い風」が吹いている！

・2020年東京オリンピック開催決定！

今後の動きに社会全体が注目している！

いつやるの？ いまでしょ！

◆誰が？ いつ？ 何を？

COREは？ JOAは？ JOCは？ 高体連は？ そしてサロン2002は？

171

VI. ディスカッション

1. 本フォーラムの財政的基盤

名方：個人負担はどれくらいになるのか？

中塚：個人負担はない。現地での滞在費・活動費はクーベルタン委員会持ちで、交通費は本校の場合、筑波大学が出してくれている。コンゴやザンビアが今回参加できなかったのは、交通費問題があったからだということをケニアの先生が言っていた。

白髭：7人組で参加するメリットは？

中塚：2人だとできないことがある。アートパフォーマンスなど。ある程度人数がいないと勢いがつかない

白髭：7人参加の国と地域は？

中塚：クーベルタンスクールは原則として7人。ただしオーストラリアは各州の代表で8人。ほかにも欠員が出て6人や5人のところはあった。アジアからは北京四中が唯一のクーベルタンスクールとして7人で来ていた。

白髭：往復の運賃への補助はないのか？

田原：そこまでは出ない

白髭：JOA は2人までは航空運賃の補助が出る。ユースフォーラムも出せそうな気はするが…

中塚：若干補助が出たというような話も聞いたけど…

田原：経済的に厳しい国に対して若干補助をすることはある。前は北京だったので、ヨーロッパの貧しい国で毎回来てくれているところに対して、補助を出して便宜を図ったと聞いている。IOCがスポンサーなので、IOCがかなりサポートをして運営できている。

白髭：ちょうど僕がIOAセミナーに出たころ、オリンピックソリダリティという話がさかんに出て、そんな言葉聞いたことがなかったのでどんなことかを聞いてみたら、「要するに、きたなく集めてきれいに使うことじゃないの？」と(笑)。その話を猪谷千春さんにしたら、すごく嫌な顔をされた(笑)。貧乏な国に多く出してあげるなど、そういう補助も出ている。

中塚：主催校はどれぐらいの持ち出しになるのか？ クーベルタン委員会が出してくれるとは思いますが、実際のところどの程度の負担があるのかが気になる。

田原：持ち出しはあるだろう。今回はスポンサーも数多く集めていた。全員に支給されたリュックはスポンサーからの提供であった。今回の場合、これまでと違って地域住民の協力がものすごくあった。そういうことができると負担が少なくて済むのだろう。

落合：全体の予算規模はどうなっているのか？ 公表されているのか？

田原：公表はされていない。開催国の事情もある。今回は物価が非常に高く、宿泊費が相当大変だった。その中で本当にやれるのかというところがあった。新しい国・学校にも入って来てほしいけど、人数が増えてしまうと経済的に厳しくてやれなくなるというジレンマがあった。

中塚：全体の会計報告が委員会の中で出てくるのであればぜひ見せていただきたい。

2. オリンピズムを広げていくには—参加国の拡大と参加者の選考

落合：全体の参加国は増えているのか？

田原：増えている。よいことではあるが、参加人数が増えると必要経費が増えてくる。マイクロバスが1台でよかったのが3台になってくると運営も大変。オリンピック大会と同じで無限に広げるわけにはいかない。

落合：どこまで広げていくのだろう。

田原：いま模索状態。かといってIOAのように各国から参加者2名というような限定は絶対にしたくない。できれば学校単位での高校生交流にしていきたいという話はしている。日本の参加に関しても、「次はフルメンバーで来いよ」とよく言ってもらっている。単独校では難しくても、合同チームもあり得るし、オーストラリアの例もある。日本でのクーベルタン賞を実施して、オリンピックの理念にかなった人を学校から選んでいくことをしていけば、オリンピズムも広がっていくだろう。一つの学校だけがクーベルタンスクールになってがんばってやっ

ていっても日本全体に広がらない。一方で広げていきながら、よい生徒を選抜していくのがよいのではないかと。そういう意味で、国内版のユースフォーラムがよいのではないかと思う。

中塚：私の中では、国内版ユースフォーラムの実施には勝手に日付を入れている。2020年が東京オリンピック。その翌年、または前年の国際ユースフォーラムは日本でやりたい。次回の2015年はスロバキアでの開催だが、できれば次回からは7人のフルメンバー、それも国内版ユースフォーラムを経験したメンバーで行きたい。とすると、来年あたりから国内版ユースフォーラムをやっておく必要がある。早すぎますかね（笑）

白髭：筑波大学附属高校では5人が立候補して2人が選ばれている。その理由は？

中塚：総合的に判断した。しかし実際のところ8月末のこの時期は、高校3年生にとっては受験勉強のまっただ中で、高校2年生も各運動部の大会等にあたることが多い。たとえばサッカー部だったら正月の高校選手権予選と重なる。だから、こういうことに興味を持つ子が応募しにくいという事情はある。ちなみに次のスロバキア大会は2015年9月の開催。ここのところ2回続けて8月開催だったので、いろんな国にとって夏休み期間だった。日本的な感覚だと、夏休みだから教師も引率がしやすく参加しやすいとなるけど、たとえばフランスは2回続けて参加しなかった。夜のティーチャーズミーティングで出ていた話だが、フランスの先生は「夏休みはバカンスで仕事はしない。9月で学校が始まってからでないと参加しない」と言っているそうだ（笑）。発想が違う。

落合：国内でフォーラムをやるのはいいが、その次にいきなり世界に持っていかないで、アジアでやるというのはどうだろう。

田原：アジアは普及が遅れている地域の一つ。中国は北京オリンピックがあったから参加するようになった。もっともっと参加を増やしていきたいと思いつつ、今回は経費面でストップをかけられたこともあり、これからもう少し普及活動に取り組んでいきたい。

白髭：オーストラリアは、国が予選をやるのか？

田原：州レベルで、各州のオリンピックカウンシルが毎年高校生を対象にしたクーベルタン賞を出している。一つの学校で一人、クーベルタン賞にふさわしい生徒を候補として推薦し、オリンピックカウンシルが条件を満たしているかをチェックし、満たしていれば候補者すべてにクーベルタン賞が与えられる。クイーンズランド州での選考と授賞式をみたことがあるが、その年の受賞者は200人ほどになった。そこでの条件は、オリンピズムを表現するような芸術作品の提出（文学でも音楽でもいい）、オーストラリアで盛んな3つのスポーツをやっていること、2つ以上の競技で学校を代表して対外試合に出場した経験があること、そして人物評価などのチェック項目があり、それらを満たしていれば学校から推薦される。この賞によって学校の中の体育の地位がものすごく上がったということを知った。それまで体育は、他の教科に比べて少し低く見られてしまうところがあったが、クーベルタン賞があって、体育やスポーツでバランスよく人間を育てていくということが前面に出たことで体育が評価され、体育の先生の地位も上がった。オーストラリアはそういう方式で、各州から代表する生徒を一人ずつ決めて、国際フォーラムに参加するという方式をとっている。

嶋崎：いまの話をもとに思ったのは、学習指導要領の改訂で体育理論を中高でやらなければならなくなった。そういうのも使ってできればいいのではないかと。うちの学校でもそうだが、体育の先生は、体育理論をどうやったらいいのかわからない。けどやらなければならない。モデルがあれば広がっていく可能性があると思った。

名方：サロンの一つの活動として、ユースフォーラムの開催はおもしろいと思った。サロンはいろんな人の集まり。今回いいなと思ったのは、世界からいろんな人が集まり、スポーツもやるし勉強もする。サロンがこれまで積み上げてきたものを発揮できるのではないかな。今年、私も小さいながら、シンガポールに小中学生を1週間連れて行った。その中で、「アジア・グラスルーツ・ラウンドテーブル」と銘打って、シンガポール大学と現地企業と日本の学生を交えてディスカッションの場を設けた。日本から、サロンが発信して、アジアのネットワークを作っていけばよいのではないかな。協力できることはやりたい。分科会があれば一つぐらいは手を挙げます。

3. 国際ピエール・ド・クーベルタン委員会とは

牛木：国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムの主催者は？

田原：国際ピエール・ド・クーベルタン委員会。

牛木：それはどのような組織なのか？ 委員はどうやって選ばれるのか？

田原：会員制組織で、クーベルタンの思想を研究したり、教育・普及したりする国際機関。希望すれば誰でも会員になれる。推薦者は必要。理事は投票による。

牛木：オリンピックという名称は、スポンサーの関係で今後ますます使いづらくなってくる。ではクーベルタンはどうか。嘉納治五郎を商標登録したらどうか（笑）。

クーベルタン委員会はこれ以外にほかの仕事もやっているのか？

田原：クーベルタン関係の出版物を出したりシンポジウムを開いたり、クーベルタンの紹介DVDを作ったりしている。以前作ったものは50分ぐらいだったが、クーベルタン生誕150年の今年、もっと使ってもらいやすいように30分ぐらいに編集してリニューアルした。日本語版も作った。

牛木：委員会の本部はどこにあるのか？ IOCとの関係は？

田原：本部はローザンヌにある。IOCとは密接な関係にある。ユースフォーラムの閉会式には毎回IOC会長からのメッセージが代読される詩、総会にIOC会長が来られたこともある。しかしIOCの組織の一部ではない。独立している。1975年にできた。サマランチより前にできている。

名方：オリンピックという名称は全部ブランドとして登録されていて使えないのか？

牛木：使えない。特に日本は頭が固い。ワールドカップのときにパブリックビューイングを新潟スタジアムでやろうとしたが、ワールドカップという言葉を使ってはならないと言われた。そのときは引き下がったが、ドイツでは訴訟になり、ワールドカップの方が負けた。ワールドカップは普通名詞なので商標登録できない。いまは「FIFAワールドカップ」として登録されている。

「オリンピック」も訴訟にしたらIOCが負けるかもしれない。しかし日本ではそのようなことはしない。アメリカならするかもしれないが、オリンピックという名称は、オリンピックのスポンサーになっているところの一業種一社でしか使えない。なぜこういうことを考えるかという、中塚さんがなにかやるようなときに、オリンピックの名前は使わない方がいい。だけどどうやってお金を集めるか。クーベルタンが使えるのならできるのではないかな。

田原：国際ユースフォーラムに参加していくというルートがあれば使えるだろう。つながっているということがはっきりしていれば許可されるはず。

4. 参加生徒にとってのユースフォーラム

大林：参加した生徒たちが、終わった後でどのような進路をたどっていったのかに興味がある。期待をされて行ったのだと思うが、行ってみてどういふ変化があったのか。先日、文化祭にお邪魔させてもらったときに、国際交流事業の展示をみた。非常に活発に国際事業に取り組んでいることがわかった。その中で、クーベルタンズユースフォーラムに行った生徒は、行った成果をどのように生かしているのかが大きなことだと感じた。生徒の感想を読んでいると、主体的に考える能力や多様性の理解ということが書かれている。これは「グローバル人材の育成」と一致している。そういったいまの流れを意識しながら、具体的なプログラムとしてやっていると、他に對する説得力も増すと思う。

中塚：いまでこそうちの学校でも国際交流事業をいろいろやっているが、そのはじまりは 2006 年のこと。シンガポールの学校（ホワチョン校）が、アジアのリーダーズサミットを主催し始めて、うちも呼んでもらった。その行事に担任クラスの生徒が行くことになったので僕も引率で行った。当時の日本からの参加者、例えば麻布の生徒やうちの生徒はみな東大志向。けどそこに集まっているアジア各国のリーダーの卵たちは、それぞれの国のトップスクールなどは考えておらず、ハーバードやケンブリッジに行って世界に飛び出すことを考えている。そういうのに触れて、日本の生徒は刺激を受けた。僕が担任していた生徒は京大に受かったけど半年でやめてハーバードに行った。いまその大学院にいる。というぐらゐの意識変化、視野の広がりはある。国際交流事業にかかわった者には何らかの変化がある。

ではクーベルタンのユースフォーラムにかかわった者はどうかというと、まだ事例が少ない。最初に行った二人のうちの一人は筑波大学の体育に行きたかったけど、筑波大がとってくれなかった。いま日本女子体育大学でダンスやっている。先日の文化祭で来校したときに、「2020 年のオリンピックで絶対ボランティアをやります！」と言っていた。頭の片隅にはオリンピックのことがあるのだろう。筑波の大学院に行ってくれればいいのだが。もう一人の子はいま早稲田大に通っている。今回も準備段階からその二人に来てほしかったけど、部活やバイトでなかなか時間が合わなかったのが残念。

田原：国際高校の生徒さんで、ドイツの生徒さんと仲良くなって、文通し、お互いに行き来して家族ぐるみの付き合いが続いているケースはあった。

5. 世界への広がり と グローバル化

牛木：参加国をみるとアメリカ大陸から来ていないが、北米や中南米は参加しないのか？

田原：メキシコにクーベルタンズスクールがある。前回は来ていたが、今回は来ていない。

中塚：広げていくことの弊害の話があったが、2 回参加してすごく感じるのは、ヨーロッパの人、とくにドイツの人の意識が支配しているということ。日本チームはすごく好まれているのを感じる。考えていることも近いし、きっちりしているし。その一方で、ディスカッションのときに離れていくギリシアの人たちとか（笑）、あまり好まれていないのではないかと感じる。前回の北京のとき、ギリシャからは別の学校が来ていたが、自分たちのスケジュールで動いているような感じがあり、委員会からは問題視されているように感じた。

ワールドカップは、あるいはサッカーは、異質なものをどんどん受け入れて、一方でぐちゃぐちゃになりながらグローバルなものになっているけど、オリンピックはやっぱり上流階級の、偉い人たちの、高尚なものにとどまっているように感じる。その純粋さがはすごくいいことだろうけど、たとえば植民地として支配されていた側の目線にはなかなか降りてこない。高尚な、そういう意味で限界のようなものも少し感じている。

田原：無意識のうちにヨーロッパ中心主義が色濃く残っているのかもしれない。それが違う文化圏から見ると、気づいたり、やり方が違うと感じるかもしれない。もっといろんな国、文化圏から入っていくと変わっていくかもしれない。これからだろう。

中塚：ということで、予定の9時を過ぎました。このあと場所を変えて続きをやりたいと思いますが、そんなわけで副校長、報告をさせていただきました（笑）。では最後に一言。

妻木：ご苦労さまでした。私も今日始めて中塚さんから報告を聞いて（笑）、いいものだと思います。これを日本で広げていくのは、大事だと思うけどなかなか大変。オーストラリアが州ごとにやっていると。予選だけでも大変でしょうね。

田原：オーストラリアでは本当に大々的にやっていて、日本で言えば文部大臣やオリンピック委員会の役員、オリンピックアンも来るといったところです。

妻木：どういう方策があるかはわからないけど、夢を語るのはよいことです。どうもありがとうございました。

続きは「ルン」で…